

## 勉強しないで卒業する方法

Quixie Stands Up for Himself by Hugh Gee

クイツシーはびくりとし、危うく試験管を落とすところだった。  
来た……。彼は即座に悟った。やがて、一騒ぎ起こるだろう事を。

窓から、一台の派手な四駆がけたたましく走り込んできて停車し、なかからピンクのけばけばしいハンドバッグを肩に背負った彼女が降りてきて、縮れたブロンドの髪を雨に打たせながら、研究棟に向かって小走りに走ってくるのが見えた。

「なんてこった……」

彼は舌打ちし、それから蒼惶として、実験テーブルに並んだ書類やペン、ピーカーや試験管、標本の類を引き出しにつっこんだ。閉めようとしたが、つっこんだ品々がうまく整理できず山盛りになり、ひっかかってしまう。

「くそ！」

彼はわめき、もう一度、それらを実験テーブルに戻し、もう一度、入れ直しはじめた。だが、焦れば焦るほど手が震え、上手くできない。

「なんでだ！　なんで入りきらないんだ！」

すでに手遅れだった。研究室のドアが音をたてて開いた。

「クイツシ〜♪」



クイッシーは、襟元のうぶ毛に水玉が滴っているのを感じた。彼は太った大男で、とても汗っかきだった。やあ、と彼は振り向き、ポケットに手を突っ込んで、神経質な笑いを浮かべた。

オードリー・ライリー。デニムのホットパンツで長い脚をさらした夢の女。ヘザー・グラハムのようなボディ。彼女がその見事なヒップを振りながら歩いてくるのを見て、股間を膨らまさない男はいないだろう。

彼女はピンクのハンドバッグを実験テーブルに置き、クイッシーに身を寄せてきた。

「ねえ、クイッシー。私のレポート、ちゃんと書いてくれた？ 締め切り、明日なんだけど」

彼は怯えて動けなくなった。確かに、レポートの代筆を頼まれた。イエスともノーとも答えなかったが、はつきり中心に回っていると信じて疑わないのだ。

その後、クイッシーは自らの気弱さを恥じ、きっぱり拒否しようと心に決めた。だが、彼女が

姿を見せた瞬間、その決意はもろくも崩れ去ったのだ。

彼女は、猫のようにびったりとくっつき、ゴージャスな肉体を擦り寄せてくる。大きな胸が、彼の腕に当たる。ピンクのTシャツが大きく盛り上がり、乳首がくつきりとその形を見せている。もちろんオードリーは、クイッシーの視線が彼女の体のどのあたりを彷徨っているか、ちゃんと心得ているのだ。

「ここ寒くなあひ？ エアコン入ってるの？」

返事が出来ない。クイッシーは、いつもの、言いたいことも言えない弱虫に戻ってしまっていた。

「エアコンつけようよお、ねえ！」

「ひ……できなこ」

「え？」

「エアコンはつけられない……。スライドに残った残留カルシウムとマグネシウムが化学反応を起こしちゃうから……」

「なにそれ？ 外国語？ わけわかんないこと言っていないでさ、ねえ、クイッシー。頼んでもたもの、早くちようだいよ。そのためにわざわざ、こんなかび臭い研究室まで来てあげたんだからさあ」

彼女はなれなれしく、彼の背中に手を回した。クイッシーは身を縮めて、荒く息をしている。

全身が汗でぐっしより濡れ、額がてかてかアスファルトのように光っていた。

「ねえ、早くう」

猫のように喉をならしながら身をくねらせたオードリーは、ふと実験テーブルに散らばった書類に目をとめた。

「あ、これね。もう全部出来てるの？ だったら、ちゃんと整理して綴じといてくれればいいのに」

「いや……」

「私、読んでも順番なんかわかんないんだからあ、さっさとやってよお」

「いやだ……」

オードリーの表情が一瞬強張った。

「……いま、なんて言ったの？」

「なにいいいいいい！！！」

オードリーは吠えた。

クイッシーの内部で、何かが起こった。彼は決心した。断固、拒否するべきだ！

「これは……不正だ……。なんでぼくが、君のためにレポートを作らなきゃならないんだ……」

彼女は大きな愛らしいブルーの目をぱちくりさせた。ちよつと怒気を含みながらも、あくまでも媚びるような眼差しで、クイッシーの眼をのぞき込み、真つ赤にネイルアートを施した指で、

彼の右頬を撫でた。

「悪いこと言わないからさあ……」

オードリーは、静かに言った。

「あの書類を整理して、順番通り並べて綴じてくれるう？ じゃないと……」

彼女の爪が、クイッシーの左頬を軽くひっかくように撫でた。

「痛い目にあうんだよお……」

クイッシーは、喉をひくつかせた。彼女は、真つ赤な厚い唇を、彼の汗まみれの襟元に寄せた。

「私を怒らせないほうがいいと思うんだよねえ……意味、わかるよね？」

「そ……それだどうした！」

クイッシーは顔をくしゃくしゃにし、泣き出しそうな口調で言った。

「で、出てっくれよ……」

その瞬間、クイッシーの全身が硬直した。次の瞬間、クイッシーはリノリウム貼りの床に四つん這いになっていた。さらに次の瞬間、股間から猛烈な痛みが全身に広がっていった。

なんて悪い女だ……。なんて卑怯な女なんだ……。

いきなり、鞆丸を蹴り上げるなんて……。

四つん這いになったクイッシーは、こみあげる嘔吐を抑えつつ、目をあげた。彼女にきれいな脚があった。左足にはグリーンのレースが、右足にはピンクのレースのはいった、銀の縁取りの

靴下に包まれた、かわいらしい足。その足がばたばたと音を立てて実験テーブルに向かった。

犠牲者が急所への一蹴りで倒れるや否や、オードリーは、テーブル上の書類をかき集めはじめた。その間、クイッシーは悶絶しつつもなんとか体を起こそうともがき、十分近くもたつてやっと、右手で凄まじく痛む股間をかばいつつ、膝を突いて立ち上がった。

「ぜんぶ、あたしがやんなきゃいけないんじゃない！」

オードリーは、ぶつぶつ不平をたれた。

「何よ、これ。つながつてないじゃない？ あ、これか……いや、違うな……ちよつとお、クイッシー！ 何時までも痛がつてないで、手伝いなさいよ！ どれがどれだか、わかんないよお！」  
「まともに論文ひとつ読めないこんな女が、わが栄光ある大学の学位を取ってしまうなんて、あつていいことではない……。」

「ちよつとクイッシー！」

いきなりオードリーは、彼のネクタイを掴んで引つ張り、無理矢理立たせようとした。

「ほら、さつさと立って！」

クイッシーも立とうとするのだが、ちよつとでも身を動かすと鞆丸に激痛が走る。膝が泳いでなかなか立てない。

「あんた、いったい何キロあるの？ 100キロはあるんじゃないのお？ さつさと立ちなさいよお！」

無駄な努力だった。オードリーは大汗かいて、脂肪の塊のような弱虫を立たせようとしたが、どうにもならない。

しびれを切らした彼女は、ついに奥の手を使った。ネイルアートやリングでごてごてに飾られた細い指で、クイッシーの股間をつかんだのだ。

「起きろ！」

言うなり、左右の鞆丸を捻りあげる。クイッシーは絶叫し、電撃を浴びたように起きあがった。起きあがった方がいいが、新たに加えられた痛撃に、身は痙攣し、蒼白な顔面に脂汗が流れている。

「お願いです……やめてください……。」

鞆丸を掴まれたまま、クイッシーの声は、甲高く裏返っていた。

「だって、ちゃんと私のためにレポート書くつて約束してたんじゃない！」

オードリーは、いきなりクイッシーの頬に平手打ちを食わせた。

「あの授業、おつことすと、私、やばいんだよ！ 分かっているの？」

「で……でも、不正はよくないです……。」

クイッシーは涙声を振り絞った。

「ぼ……ぼくは……まじめに講義にも出てるし……ちゃんと図書館通つて、三週間もかかつてレポートも書いたし……それを……何もやってない君が……横取りしようとするなんて……あ、あ

んまりだよ……許せな……ぎゃああああ!!!!!!」

嗚咽が絶叫にかわったのは、オードリーがさらに力をこめて、睾丸を捻りあげたからだ。彼の急所に食い込んでいたのは細い女の指にすぎないが、まるで巨人に全身を掴まれたように、クイッシーは前後左右に激しく痙攣した。

「や……やめろお！」

やっと声を張り上げたが、オードリーはますます力を込めた。

「そういう言い方しちやっついていいのお？」

眉をあげて軽蔑したように笑うオードリーに、クイッシーは顔を歪めて号泣した。

「お……お願い……です……」

「じゃ、さっさとレポートくれる？ 助けると思ってたさ」

「……いやだ！」

クイッシーは気力を振り絞って意地を張った。

「ママが……言ってた……君は……とんでもない女だって……うぎゅう!!!!!!……だから……助けてなんか……誰が……ぎゃああ!!!」

クイッシーは眼をつぶり、唇を歪め、必死に耐えていた。まるで、水気を絞りきったスポンジみたい……。オードリーは、ぼさぼさの真っ黒な髪の毛を振り乱し、涙を滝のように流しながら苦痛に苛まれる弱虫小僧の表情を楽しんだ。

「どくでもいいけど、あんたちゃんと理髪店にいつてるの？ そんなだらしなない髪してるから、みんなから、おたくの弱虫扱いされるんだよ？」

「や……や……やめ……」

「やめせんよ。レポートくれるって言うまで、やめないからね！」

「ほ……ぼくのレポート……うぎゃあ!!!!!!……き、君に理解……できるのか?……」

「誰のだっていいんだよ！ わけわかんなくなつたつていいの！ とにかく、私は学位がほしいの、それだけ！」

凄まじい重圧が、クイッシーの二つの睾丸を変形させた。彼の腰は背後の実験デスクに支えられ、ようやく立っていられた。丸い顔が天井に向けられ、口が裂けそうに開いた。

オードリーは、右手で彼の急所を攻めつつ、激しく上下する喉笛を眺めた。クイッシーはのけぞったまま、顎を下げることもできずに硬直している。ちよつと右手を緩めた。クイッシーはぜひい喘ぎながら、四肢の緊張を緩和させた。

涙で真っ赤に腫れた眼が、オードリーを見ていた。涙でぼやけていたが、クイッシーの視界に、彼女の整った美しい顔が映った。何度もその美貌を思い浮かべ、その豊かな乳房を想像し、自慰にふけたものだった。

いま、オードリーのゴージャスな美貌は、すぐ間近にある。美しいブロンドの髪。整ったかき鼻。青い澄んだ瞳。薄くアイブローを塗った眼。なだらかなラインを描く顎。

そんな美少女が、どうして、ここまでひどいことをやらかすのだろうか？ 男の最大の急所を蹴り上げ、潰さんばかりに捻りあげているなんて……。

「で、どうするの？ レポートくれるの？ それとも、金玉潰されたいの？」

「や……や……」

「あなたは陰気な弱虫だけど、成績はいい。私はこの単位を落とせない。だから、あなたの助けが要る。あなたが書いたレポートを私に譲ってくれれば、それでオッケー。簡単なことじゃない」

「で……でも……」

「でも、なによ？」

「あ……あが……」

「まともにしゃべれないの？ しょうがないなあ！ わかったよ」

彼女は、さらにもう少し、右手の力を弱めた。

「で、なに？ さっさと言いな！」

「そ、そのかわり……、ぼくは、その、何かしてもらえるの……？」

「え……？」

「君にレポート譲るってだけじゃ……君が得するだけじゃないか……」

クイツシーは俯いて啜り泣いた。

「このレポートだって、ほんとうに苦労して、やっと書いたのに……」

「あのさあ、クイツシー」

オードリーは呆れたように微笑んだ。

「いまさ、あたしが触ってるのは、何？」

クイツシーは嗚咽したまま答えなかった。

「何！」

鞆丸に圧力がかけられた。クイツシーはびくと痙攣し、叫んだ。

「こ、答えます！」

「何よ？ 私が触ってるのは、何？」

「ほ……ぼくの金玉です……」

「そ、あなたの金玉よ。あなたこれまで、他の女の子に、股間を触られたことってある？」

「あ……ありません……」

「でしょ！ だから、サービスしてあげてるんじゃない」

「で、でも……」

「でも、何よ？ あ、もうやんなっちゃう！ あんまりイライラさせないでよ！」

「でも……その、すごく……痛いし……」

「当たり前じゃない！ あなた、自分の顔、鏡でみたことないの？ あんたみたいな、汗っかきの、太った子豚みたいな弱虫が、女の子に気持ちよくしてもらえるとでも思ってるの？ 触って

もらっただけでもありがたいと思わなきゃ、罰が当たっちゃうよ！」

クイツシーは身を震わせて激しく泣いた。屈辱と苦痛に泣いた。

泣きながら、彼は決心した。

このまま彼女に従ったら、一生、駄目人間のままで。

今度、彼女が拳丸を握る手を緩めたら、彼女を突き飛ばし、そして、戦おう。急所さえやられなければ、物理的な力は男のほうが上だ。男の強さを、この世の中を舐めきった女に思い知らせてやる。

戦うんだ、クイツシー！

「わかった……」

彼は言った。

「レポートはあげる……」

「早くそう言いなよ」

オードリーは鼻を鳴らした。

「痛い目にあわずにすんだものを」

彼女の手が、クイツシーの股間から離れた。さすがに疲れたのだろう、汚いものを払うように、手を振っている。

いまだ！

いけ、クイツシー！

クイツシーは、猛然とオードリーに襲いかかった。拳を固めて腕を振り回した。空振り。もう一度、パンチを突きだした。またも空振り。

オードリーは巧みにパンチを避けた。だが、破れかぶれになって腕を振り回してくる肥満児に、反攻する暇を与えられず、じりじりと壁に向かって後ずさるしかなかった。

ふと、振り回した拳が、柔らかなものに当たった。オードリーの足が止まった。両腕で上半身をかばい、身を折った。

胸だ……。

偶然、クイツシーのパンチが、オードリーの大きな乳房に当たったのだ。

「そ、そうか……」

クイツシーは呻いた。

「そこが……女の急所なんだな……」

オードリーがやっと顔をあげた。美しい顔が苦痛に歪んでいる。立っているのもやっつとのおようだ。

「ざまあみる！」

クイツシーは勝ち誇った。

「すぐに出ていけ！ さもないと、同じ所をもう一度、殴るぞ！」

彼は、ファイティングポーズをとりながら、じりじりとオードリーに歩み寄った。彼女は眼を  
臥せたまま、動かない。

「痛い目にあいたくないなら……」

クイッシーは、右手の拳を振り上げ、左手で彼女の喉を掴んだ。

「出て……!!!!!!」

脅し文句は途中で中断された。

オードリーの右膝が、クイッシーの股間に食い込んでいた。クイッシーの四肢は、力が一気に  
抜けたようにだらりとなり、やがて地響きを立てて床に転がった。

「金玉ほどの急所じゃないよ……バカ」

オードリーは、胸をさすり、顔をしかめながら、俯せに倒れて痙攣するクイッシーに唾をはき  
かけた。

クイッシーは、かわいそうに、失神したわけではなかった。火がついたように痛む股間を両手  
で押さえ、つぶった眼から滝のように涙を流し、こみあげる嘔吐をこらえながら、呻いていた。

鞆丸から太股にかけて、痛撃以外の感覚はなかった。恐怖がこみあげてきた。彼は、他の男の  
子と遊んだ経験がほとんどない。鞆丸を何かにぶつけて痛い思いをしたこともない。いったい、  
金玉はどうなってしまったのだろうか？ ひよつとして、潰れてしまったのか？ もう二度と使え  
なくなってしまうんじゃないか？ 童貞の彼にとってたった一つの楽しみであるオナニーもで

きなくなってしまうのか？

「う……うう……」

むせび泣く彼を見下ろしながら、オードリーは歌うように言った。

「よっぽど痛かったみたいね」

それから、実験テーブルに向かい、引き出しをひっかきまわしはじめた。

「ええと……つたく、どれなんだろう……あ、そか！」

オードリーはぱちんと両手を叩き、パソコンに向かった。

「データが残ってるはずだよね」

散らばった書類を順番通り並べる必要はない。パソコンに残ったデータをプリントアウトし  
えすればよいのだ。

「や……やめろ……」

そう言おうとしたが、声はしわがれ、オードリーの耳には入らないようだ。プリンターが音  
たて、クイッシーが三週間かかって書き上げた苦心のレポートを吐き出し始めた。

「……やめろ……」

クイッシーは必死にもがいた。

これは不正だ……。

ろくに授業も出ず、図書館など足を踏み入れたこともなく、キャンパスはバスケット選手やフ



ットボール選手にナンパされる場と心得、理学部にいくせにまともに元素記号すら覚えていない女が、美貌と暴力でやすやすと学位をゲットするなんて、そんな不正を許してはならない……。

クイッシーは、最後の力を振り絞った。ようやく、上半身を起こし、片膝を突いた。激しく痛み股間を片手で押さえたまま、必死で腰を浮かせ、両脚を伸ばした。

「うおおおおおおお！！！！」

クイッシーは吠えた。オードリーがぎくりと振り返った。プリンターから吐き出された最後の一枚を手にしたまま、再び立ち上がったクイッシーを凝視した。

だが、それ以上、クイッシーは一步も前に出られない。ぶくぶくと太った体は左右に揺れ、細かく震えている。

オードリーは、表情を緩め、きれいな白い歯を見せた。

「がんばれ、デブ！」

次の瞬間、彼女のつま先が、クイッシーの睾丸を襲った。

ぐしゃ！

右の睾丸に、彼女のつま先が食い込み、すでに激しく内出血を起こしていたそれは、音をたてて破裂した。

「うー！」

睾丸から脳天にかけて電流のように痛みが突き抜けた。上半身は硬直したまま、膝が崩れた。

再び俯せに倒れたクイッシーを見つめ、オードリーは高らかに笑った。

「これ、もらっていくね」

横倒しに倒れ、白眼を剥き、意識があるのかないのか、唇から涎を垂らしているクイッシーの顔の前で、プリントアウトされたレポートをひらひらと振って見せた。

「それから、データは消去しとくね。これ、私にくれたんだから、あんたはもう要らないでしょ？」

三週間の努力の結晶は、美しく、傲慢で、無慈悲なバカ女によって、煙と消えた。オードリーは、ピンクのハンドバッグを拾い上げて肩にかけ、ドアに向かった。

ふと、オードリーはドアを開けて立ち止まり、振り返った。こちらに背を向けて倒れているクイッシーに、彼女は、邪悪で官能的な微笑を浮かべて言った。

「ありがとね、クイッシー。お礼に、左の金玉だけは、残しておいたからね」